

第二世代の中国外交官

あおやま るみ

中国・北京生まれ。慶應義塾大学商学部卒業、同大学大学院法学研究科博士課程修了（政治学専攻）。早稲田大学専任講師を経て、二〇〇二年四月より現職。共著書に「江沢民、朱鎔基の語る21世紀の中国——第15回党大会報告を中心に」など。中国の対外関係や中国外交に関する論文多数。

青山瑠妙

早稲田大学助教授

五年に一度開かれる中国共産党代表大会で胡錦濤総書記をはじめとする新指導部が誕生した。現在、中国の外相を務めている唐家璇の去就は現段階では定かではないが、大の親日家として彼の功績は大きい。

革命・建国の荒波から国際社会での外交を中国に目覚めさせたのはバンドン会議であった。周恩来はバンドン会議から帰国後、国連への復帰をにらみ「外交幹部養成二二カ年計画」を制定し、外交エリート育成に着手した。この計画に基づき、将来の対日外交を担うべき人材として選ばれた十数人のうちの一人が唐家璇であった。唐家璇

らは北京大学で通訳養成のための日本語の特修を受け、生え抜き外交官としてスタートを切った。

ナイフ・フォークやベッドにすら慣れていない人民解放軍出身の第一世代の外交官の通訳。これが若き唐家璇の駆け出し時代だった。中国指導者の通訳の経歴は、中国外交官出世の花道と見られていたが、この花道を極め、毛沢東の第一世代から江沢民の第二世代までの中国外交を支える仕事に一筋に打ち込んできた唐家璇は、まさに外交部の「生え抜き社長第一号」だった。

唐家璇は日中関係において、二度の日本滞在で、北京大学仕込みの日本語を駆使し日本の各界に人脈を築いた。唐家璇に加え、同期の徐敦信元大使、陸琪元大阪総領事は

「二羽鳥」として日本の外交関係者からもその功績を評価されている。

また、こうした経歴から唐家璇は日中関係に対する使命感が非常に強い。日本で不評を買った田中真紀子前外相との「おやめなさい」騒ぎでも、律儀なまでに日中関係の大局を優先しようと行動したが、唐家璇はそういう意味でも模範的日中友好人士であった。

しかし、現在はもはや「日中友好のため」ですべてよしとする時代ではない。国際化と情報化のうねりが中国を根底から変えようとしている。中国と国際社会との相互依存関係が深まり、四〇〇〇万人がインターネットで政治や外交を議論しているなかで、中国の外交に求められる課題は多い。単にある国の専門家、ある言語のエキスパートだけではなく、今の外交官は高度な組織性、専門性が必須であると中国では認識されるようになった。外交幹部の人事改革に伴い、二〇〇一年三月の公開試験を通じて選抜された外交官は、すでに職務についている。彼らの平均年齢は四四歳である。唐家璇を代表とした第二世代の外交官は大きな功績を残したが、国際動向や中国の内なる変化を敏感に感じ取る外交専門家への権力移行は決して遠い未来の話ではない。G